公平という不公平

平成元年から、これまでの共通一次に代わって入試センター試験が実施された。

この試験ほど『公平』な試験は、世界でも例がないのではないか。全国一斉に、同時刻に同内容の問題を解く、というだけでない。遅刻、退場、病人や不正行為の取り扱いは一律である。試験官の話すべき言葉も、分刻みですべて決められていて、それ以外の言葉を発してはならないことになっている。一万人を超える全国の試験官は、監督要項なる三十ページほどの小冊子を片手に、時計を神経質に見ながら、「問題冊子の表紙の注意事項を読みなさい」、とか「受験番号が正しくマークされているか確かめてください」、などとロボットのように読み上げる。

名前や受験番号の書き忘れを見つけても、その場で注意してはいけないことになっている。他に同様の者がいた場合、不公平になるというのである。採点や集計はコンピュータがするから、もちろん『公平』である。この試験は『公平』を金科玉条としている。

試験をとりまく状況のすべてが不公平である時、このような『公平』にどんな意義があるのか疑問である。子供の頃から良い家庭教師についたり、良い塾で学ぶ機会を与えられた裕福な家の子弟と、そうでない子弟との差はどうか。現に最近の調査では、東大生の親の平均年間所得は、大学生一般の親のそれを二百万円も上回っているという。都会と田舎の差はどうか。現役と浪人の差は……。

文部省や大学側の考える『公平』は、本当の公平とは懸け離れた形式的公平にすぎない。大学独自に行なわれる二次試験も、センター試験ほどではないが客観的かつ公平無私といえる。

入試で公平を追求すれば、必然的に暗記物中心となる。暗記物はきめ細かい配点が可能なうえ、採点に一切の主観が混じらない。さらに成績が努力とほぼ正比例するから、これ以上公平な入試はないといえる。

暗記偏重を批判する声はよく聞かれるのに、いつまでたっても改められないのは、じつは国民が意識下でそれを是認しているからである。努力だけが直接的に報いられる公平入試を、ほとんどの受験生や親たちは望んでいる。他の資質の多くは、評価に主観が入るし、また必ずしも国民の間に均質に分布しているとは限らず、平等の原理に抵触する恐れがある。大学にとっても、公平とは「人にとやかく言われない」の意だから、自ら改めるつもりは

ない。

フェアーであることが、日本に比べイギリスでは破格の重要性を持つことを、近著『遥かなるケンブリッジ』で述べたが、大学入試に関しては逆転する。

私が教えていたケンブリッジ大学のクイーンズカレッジで、入試面接官をつとめたことがある。数学科志望生に対するもので、各人につき三十分ずつ三人の教官が面接した。バイオリンが趣味と言ったものには、「バイオリンが箱形でないのはなぜか」、卓球部の生徒には、「ピンポン球をカットするとなぜ曲がるのか」、と臨機応変に聞いた。質問は読書傾向や友人関係にまで及んだ。合否判定にあたっては、面接と統一テストの対等の重みで扱われていた。主観が半分ということになる。

ケンブリッジ大学が公平にこだわらないのは、エリートを選別して育てたいためである。だから断片的な知識などより、論理的に考え、表現することができるか、生きる姿勢はどうか、などを重視していた。ある教官が家族や政治にまで切り込んだときはハッとしたが、家庭環境に探りを入れているようだった。

真の国際化教育とは、外国の言葉や風俗、文化、地理、歴史を学ぶことだけではない。強靭な論理的思考力や深い情緒力で武装することの方がはるかに重要である。このような教育により生まれるエリートは、これまでの偏差値エリートとちがい、国際人としての高い戦闘能力を備えることになろう。混迷を深める日本、そして世界を救う人材は、そんなエリートであると私は思う。大学は蛮勇を奮って、公平と距離を置くべきである。民主主義の先達であり公平が何より大切なイギリスで、大学が主観を重視することの示唆するものは大きい。（一六四〇字、引用にあたって一部表現と表記を改めた）

藤原正彦『数学者の休憩時間』（新潮社、平成5年）より